

《影のない女》の「ハッピー・エンディング」

2021/11/24



今朝も良いお天気のお秋晴れです。嬉しいことにコロナ禍も、どうしたわけか、急に収束にむかいました。どなたか、天使ミカエルかまたはヤマトタケルが、持っていた剣を鞘に収めるのをどこかのお城かお寺の屋根の上でご覧になられた方はいませんか？

NHKの講座の先回は、《影のない女》の第2幕の終わり、バラクが剣をとって女房を殺そうとするところまで観ました。歌舞伎の「外連」(けれん)がみられました。そして、いよいよ、最後の第3幕です、皇后はバラクの相手を思う優しい心に心打たれて、女房の影を奪うとこを止めます。そうすると、皇帝は石にさせられてしまいます。さあ、これも困ったことです。どうなるのでしょうか？ でも、ご安心下さい。最後は、めでたく「ハッピーエンディング」(「ハッピーエンド」は和製英語で間違い)で終わります。

この楽劇が初演された1919年は第一次世界大戦が終わった翌年、勝利国フランスのヴェルサイユで平和会議が開かれました。これは、イギリスの経済学者ケインズが声高に異議を唱えた不平等なものでした。同じ時に、敗戦国のオーストリアのウィーンで《影のない女》が初演されました。これこそ「平和会議」にふさわしいものでした。ケインズも納得したことでしょう。

そこで思いました — 「オペラには悲劇と喜劇があるといってきたが、それは間違い。オペラには喜劇しかない。悲劇は喜劇の最後の10分を省略したのだ。モーツァルトの《ドン・ジョバンニ》も、シェイクスピアの4大悲劇の『マクベス』も『ハムレット』も最後の10分で喜劇になった」。このコロナ禍も最後の10分が大事です。喜劇に終わらせるために、わたしたちは、まだまだ努力が必要です。

都築正道